生きるとは（仮）

こぽ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最愛の姉と両親を失った彼女
生きる希望もなく、過ごしていた彼女に
転機が訪れる
いろんな人との出会いを経て
徐々に感情を取り戻していく中
明かされなかった真実にたどりつく
そんな不器用な彼女とガールズバンドたちのお話

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 12

第1話

「姉さん!!姉さんってば!!!」
「大丈夫…だから……泣かないで…」
「だって、血が!!それになんでかばったの!?」
「あなたのお姉ちゃん…なんだから…当たり前だよ…それに…私は死ななないから大丈夫だから……」

その後、私は意識を失い、目覚めた時には姉さんはいなかった
夏が終わり、葉が色をつけ始めた秋の頃だった

時は過ぎ、何度目かの桜が舞う春の季節になった
この季節は新年度の始まりであり、入社式や入学式などが行われる
在校生は短い春休みを終え、代わり映えのない退屈な一年が始まる
しかしここ、羽丘女子学園では今までにない出来事が起ころうとしていた

「ゆきなーおはよー☆」
「おはよう、今日もリサは元気ね」

二人組の女子高生が学校に向かっていた
最初に呼ばれた銀髪の少女の名は湊友希那。Ｒｏｓｅｌｉａのボーカルで歌姫と呼ばれており、猫が好き

次に呼ばれたギャルっぽい少女の名は今井リサ。Ｒｏｓｅｌｉａ

のベース担当でコミュ力オバケである

「そういえばさ、友達から聞いたんだけど羽女が共学になるかもしれないって噂が流れてるんだって～」
「そう、私にはどうでもいいことだわ」
「えーでもいきなり男子が入ってくるってびっくりするじゃん、あくまで噂だけどさー」
「それより練習が大事よ、ライブに向けてもっともっと完成度を高めないと」
「はいはい、今日も頑張っていこうね☆」

その後学校に着き、クラスを確認し教室まで向かった
友希那はB組、リサはA組だった
リサは友希那と離れ離れになったのを残念がっていたが新たな仲間たちの出会いにウキウキしていた
教室に入るとエメラルドグリーンの髪をした活発そうな子と紫の髪をしたポニーテールの子がいた

「あ、リサちーおはよー」
「やぁリサ、今日も儚いね」

リサちーと呼んだ活発そうな子の名前は氷川日菜
一回見ただけでなんでもできるようになってしまう、いわゆる天才と呼ばれている。彼女自身感覚でやっているため、るんっときたと言ったり会話に擬音が多いことが多々ある。アイドルバンドのパステルパレットのギター担当である

儚いと言った子の名前は瀬田薫
演劇部に所属しており演技力と容姿もあってか学校の人気者であり、周りの子を子猫ちゃんと呼んでいる。事あるごとに儚いというためその言葉が気に入っている模様。シェイクスピアも好きな様子。

ハローー・ハッピーワールドー・というバンドのギター担当である

「おはよーこれから二人共一年よろしくね☆」
「ねーねーリサちーは聞いた？共学の話！」
「噂ぐらいしか聞いたことないけどヒナ知ってるの？」
「ううん、全然情報が出てこなくてさーリサちーなら知ってるかと思って」
「そういえば子猫ちゃん達が言っていたような気がするな」
「ほんと!?」
「あぁ、でも詳しいことは知らないみたいだったからまだみんな知らないんじゃないかな？」
「そっかー残念だなー久々にるんってきたと思ったのに」
「まぁまぁ、これだけ話が出てれば先生達が言うと思うしそれよりそろそろ始業式始まるから行こっか」

三人は式が行われる体育館へ向かった

式は着々と進み、生徒たちに眠気が現れてきたその時、理事長から発表があった

「最近少子化が進んでおり、我が校も年々生徒数が減っていっています。近い将来学校が合併したり共学になったりということがあるかもしれないと教育委員会の方からそのことを伝えられました。それに対応するということで今年から共学として試験的に実施することが決定しました。」

あまりに突然の出来事で周りがざわつく

「ですがここはあくまで女子校です。いきなり変えるのは難しいこと

だとこちらも説明をし、擬似男子高生としてある女の子をこの学校に通ってもらうことにしました。それじゃあ、紹介するので上がって来てください」

全生徒が困惑している中その生徒は緊張などかけらもないような表情で無表情のまま理事長の隣に立った

「この子の名前は水瀬光さん、これまではアメリカに住んでいました。クラスは2学年に所属してもらいます、じゃあ簡単に自己紹介してもらっていい？」

「ただいま紹介に預かりました、水瀬光と申します。至らない点があるとは思いますがどうぞよろしくお願いします」

その女性はこの学校の制服を着ており、下はスラックスをはいていた。その部分で共学部分を出しているのだろう。髪の色は黒くショートカットなのだが前髪は長く顔を隠していた。だが、その隙間から見える顔立ちが中性的でとても綺麗だった。目はキリッとしており前をしっかりと見据えていたが心ここに在らずといったようにも感じられた。リサは何故だか彼女から目が離せなかった

「(なんでだろ、あの子から目が離せない。)」

「では、式はこれで終了とします。皆さん困惑しているかと思いますが学校生活を楽しんでください」

突然の発表に頭がついていかず、式は終わった

「ねーねーすっごい！るんってきたよ!!リサちー!!」

「わかった、わかったからヒナ。お願いだからもう揺らさないでー」

「だって絶対面白いよ!!薫くんもそう思ったでしょ？」

「そうだね、彼女には何かありそうな感じがしたよ。そしてとても儚かった…」

「あはは…そっか…」

「2学年って言ってたしうちのクラスにならないかなーリサちーの隣の席の空いてるし」

「どーだろうね、去年も空いてる席あったしまぁそんなトントン拍子

にくるわけ」
「はーいみんな席に着いてー転入生を紹介します」
「うそ、そんなまさか」
「水瀬光です。今日からよろしくお願いします」

少女達の物語が始まった

第2話

「さっき理事長が言ってたけど、1年間？だったか忘れたけど試験的に共学に慣れるということで水瀬さんが入学する形になりました。でもってそのクラスがうちのクラスでーす、みんなおめでとー」

担任のあまりにも軽すぎる発表に周りは唖然とする

その中で日菜は1人だけウキウキとしていた

「まぁ共学って言っても水瀬さん女の子だし制服ぐらいしかそういう要素ないから普通に過ごしてもらってかまわないよ、水瀬さんもそっちのほうがいいよね？」

「そうですね、転校生が来た程度に思っていただければありがたいです」

「だってさ皆もかたくならないよーに、その見本として先生は今から水瀬さんのことを光って呼ぼうと思う!!」

教師の突然の発表に、いや知らねーよと言いたげな雰囲気が流れる

「えぇ…すごい唐突だなぁ」

「あぁ特になんとも思わないのでご自由に」

冷めているのか本当になんとも思ってないのかこの反応である

「やった！あ、まだ自己紹介やってなかったね、失敬失敬。じゃあ改めてどうぞ」

「先程も言いましたが水瀬光と言います。いろいろ思うことはあると思いますがこれからよろしくお願いします」

「まったく光もかたすぎるよ～もっとラフに行こ～」

「今までこんな感じだったんですけど、善処します」

「まぁいっか、じゃあ席はあそこの今井の隣って言ってもわかんないか。あのギャルみたいな子の隣ね」
「ちょっと先生！」
「ごめんごめん、じゃああの席でよろしく」
「分かりました」

ノリの軽すぎる教師からの紹介が終わり、光は席に向かう
窓際の一番後ろに着席した

「えーっとアタシの名前は今井リサ、よろしくね。何かわからないことがあったら気軽に聞いてね☆」
「こちらこそよろしく」
「光くん！あたしの名前は氷川日菜だよ!!」
「あぁ…よろしく…」
「こら、ヒナ。光がびっくりしてるじゃん」
「やぁ私の名前は瀬田薫。君はとても儚いね…」
「は、儚い…？」
「あーごめん、そこに関してはあんまり気にしないで」
「そうか…よろしく」

個性が強すぎるクラスメイトに囲まれた光は戸惑いを隠せない。進学校と聞かされていたのだが隣の席の茶髪の子はピアスやアクセサリーを普通につけており、その前の席のエメラルドグリーンの髪をした子はるんっときたというよくわからない擬音を発している。光の前の席の紫色の髪をした子は儚いという言葉をずっと言っている。羽丘の生徒は好きな単語を口にしないといけないという決まり事でもあるのか？と光は感じた

「あはは…2人ともこんな感じだけどいい子だから」
「苦労してるんだな…」

授業が終わるとクラスメイトに囲まれ質問責めに光はあっていた。転校生ということもあるが事情が事情なために他クラスはもちろん他学年の人達も野次馬に来ている始末である。そして昼休み

「人収まりそうにないねー」
「悪いな」
「大丈夫大丈夫気にしないで、光はお昼どうするの？」
「昼に来いって理事長に呼ばれてるんだ、多分それで潰れる」
「そっか、いろいろあるもんね。いってらっしゃい☆」

光はリサに手を振って人が集まる前に理事長室に向かった。その後リサが光の行方についてたくさんの生徒に聞かれたことは言うまでもない

―――――――――――――――――――――

コンコン

「どうぞ」
「失礼します、水瀬です」
「あら、あお…」
「光です」
「…まったく、まぁいいわ。どう久しぶりの学校生活は？」

光が向かった先は理事長室。理事長は光の両親の古くからの友人である

「人が多くて人酔いしてました。当分なれそうにないです」
「ふふっ、ゆっくり頑張ってね」
「それよりちゃんと説明して欲しいんですけど、どういうことですか？」

光は、羽丘が少子化で人数が減ってることや共学になりそうになっていることなどかけらも知らなかったのである。しかも自分が試験生として入るなんてことはさっきの式の最中に知ったのであった。あの時は混乱を避けるため普通に挨拶をしたが内心は頭の中がごちゃごちゃしておりなんとかごまかしたのだった

「まぁいいじゃない。それに説明したら来なかったでしょう？」
「…それについてはなにも言えないですけど」
「説明しなかったのは申し訳なかったけどこうでもしないと外に出ないと思ってね」
「…私は生きていてはいけない人間なんです。充実した人生なんてなおさらだめなんですよ」
「はぁ…そう。でも私はあなたが笑顔に生きていけるように手助けをするってご両親と約束したからね、おせっかいは続けるわよ」
「そうですか…」

光の両親はもうすでに亡くなっており、彼女の心の傷の1つになっている

「改めて聞くんですけどなんで私をこの学校に？高校の課程は終わってますし、なんなら大学まで終わってるんですけど」
「終わったと言っても飛び級して卒業したんでしょう？それじゃあ青春を味わえないもの」
「青春って…それに私もう日本の法律でも成人してるんですよ。普通に厳しいものがありますよ」

「何歳になっても青春は味わえるものよ。それに共学については前から話があってね、どうしようかと思ってたら光の事を思い出してこれは！って思ったのよ」
「ようはたまたまなんですね。はぁ…まぁいいんですけど」

アメリカで大学もすでに卒業している光は高校に通う必要がないのだが青春を知ってもらいたいということで理事長に半ば強引に入学させられたのである。ただ高校の過程は卒業しているため３年間通う必要もなく１番青春ができそうというよくわからない理由で２学年に入った次第である。諸々の理由が重なったというのもあるが理事長が光の事を心配しているのはいうまでもない。

「で、私はどのように過ごせばいいんですか？試験生としてなんかやっておいた方がいいこととこあるんでしょうか？」
「うーん特にないのよね」
「は？」
「いや本当に考えがないってわけではなくて目的としては男子の耐性をつけるってのが本題だからあまりないのよ」
「それに私は共学になんて絶対させないから」
「えぇ…そんなことできるんですか？」
「なんとかしてみせるわよ。伝統ある女子校だし、そう簡単にさせないわ！」
「私の立場がないんですけどね…」
「まぁまぁそれは置いといて」

「光には今を楽しんでほしいの。同年代のことたくさん遊んだり、時にはぶつかったり、いろんなことを体験してほしい」
「あなたは１人じゃない、そのことだけはわかってほしい」
「…ありがとうございます。出来るだけ頑張ってみます」
「あ！好きな子ができたらちゃんと教えてね。それも後見人の務めだからね」

「絶対言わないので大丈夫です」
「えー楽しみにしてたのにー。あ、もう昼休み終わっちゃうわ。ごめんね貴重な休みを、また詳しいことは連絡するわね」
「いえ、こちらこそ。では失礼します」

理事長の威厳を感じられない会話が続き、この学校は全体的にゆるゆるなところなんだと思った光なのであった

第3話

なんだかんだで授業が終わり放課後になった、光はチャイムと同時に姿を消した。
自宅に向かうわけではなく、ある家に向かっていた。
ピーンポーン

「あら、いらっしゃい」
「どうも」
「随分早かったわね、てっきり誰かに捕まって遅くなるかと思ってたわ」
「めんどくさかったのですぐ抜けてきました」
「みんなと交流してきてよかったのに」

理事長はこれを機に光に若々しさを取り戻してもらいたいと思っているがまだまだ難しい様子。対して光はとっとと用件を聞いて家に帰りたい気持ちでいっぱいであった

「で、用件はなんでしょうか?」
「せっかちね~ほんと。まぁいいわ、とりあえずあなたのアルバイト先決めちゃったわ☆」
「…は?」

デシャヴのようなというかまさにデシャヴのようで開いた口が塞がらない。そして流れるような事後報告

「今すぐは体も慣れないと思ったから来週からお願いね☆」
「いやちょっと待ってください、昼の時もだったんですけどなんでそんな唐突なんですか?当事者の意見も聞いてくださいよ!」
「だって、聞いたところでやらないでしょ」

ごもっともである

「…それはなんともいえないです」
「でしょ？じゃあ私の意見に身を任せてみなさい！せっかくなんだから！」
「はぁ…納得はできないですけどもう決まってることなんですよね？」
「えぇ！もちろん!!」

胸を張って自信満々に答える理事長に呆れ返っている光。バイトなんてしなくても当分は衣食住に困らないほど蓄えはあり、極力人との関わりをしたくないと思っていたのだがそうもいかないらしい。まぁ転校生という時点でそれは不可能に近い、というか無理だ

「はぁ、そうだと思いました。でバイト先はどこですか？」
「ライブハウスよ」
「…っ、なぜそこなんですか」
「知り合いがそこで働いてるっていうのもあるんだけどね、一番は貴方に楽器を弾いてもらいたいから」

先程までのお茶目な雰囲気はどこへ、というように光を真剣な目で見つめる

「…今でも弾いていますよ」
「それとは違うわ、音楽を楽しむと書いて音楽なのよ」
「あの頃の貴方は「私は!!生きる価値のない人間なんです！楽しむなんてことしてはいけないんです!!」
「……そう。それでも私は、あの頃の貴方が奏でる音が好きだったわ」
「ごめんね、今日はもう大丈夫よ」
「……いえ、こちらこそ」

「また連絡するわ、あとこれだけは覚えておいて。困ったことがあったらいつでも頼りなさい、私は貴方の味方よ」
「…ありがとうございます、失礼します」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「はぁ…やってしまった」

声を荒げてしまったことを後悔しているようだ。いくら突かれたくない内容だったといえ人の好意をあんな形で否定してしまったことに反省をしている様子だ
だかやってしまったことは仕方ないと思い、自宅周辺の地理を把握するために寄り道をすることにした光

「しかし、あの人も強引だよなぁ」

先程試験生のことを話していないと言っていたが、理事長は全ての説明を省いていたのだ。一昨日、突然アメリカの自宅に現れたと思ったら「日本に住むから荷物をまとめろ」と言われ、あれよあれよと進み昨日日本に来たばかりというびっくりスケジュールなのである。高校に通う云々は用意されていた自宅のクローゼットに制服があり、それで気づいたのであった、もし気づかなかった場合はどうなっていたのだろうか、という部分は置いておこう

「ここは、公園か」

ブランコにすべり台、砂場と一般的な公園で子供達が遊んでいる

「楽しそうだな…」

悲しいのか虚しいのか、よくわからない気持ちを抱えながら通り過

ぎた

他には最寄りのコンビニや病院などを確認し、商店街まで足を運ぼうとしたのだが疲れが勝ってしまったため今度にしようとした。自宅に戻りそのままベットにダイブしたのであった